

鈴木日出男氏『古代和歌史論』（平成二年・東京大学出版会）の「序・第三章・女歌の本性」では、まず「女歌」が次のように定義されている。

ここでいう女歌とは、ただ女が詠んだ歌をさすだけでなく、実際には男が詠んだ歌であつても、どこかに女の詠みぶりを思わせるようなところのある歌を含めてゐる。すなわち、もともと女の歌に特有の発想や表現によつた歌のことをさしている。

鈴木氏はさらに、「男女の恋の贈答歌の一般的な作法」を「はじめに男が懸想の内容を詠みかけると、それを受けて立つ女が何らかの形で反発的に詠み返すという作法」と説明され、続けて「こうした反発、切り返しの発想は、贈答歌における返歌の常套としての、女歌に特有のものではないかと思われる」と述べられたうえで、それについて「おそらく、贈答歌の最も原初的な形であつたらしい歌垣以来の伝統であろう」と推測しておられる。

鈴木氏の見解、特に「反発的に詠み返す」「女歌」の作法の起源を「歌垣」に見るといふ見方は、藤井貞和氏が『源氏物語論』（平成二年・岩波書店）第一章第三

節その他で述べておられるように、折口信夫が「古代生活に見えた恋愛」等で主張した説を継承したものと考えられる。これに対し藤井氏は、『万葉集』にみると、女から積極的に向つたを男に詠みかけるケースがけつしてすくなくないから、折口説はかならずしもなりたつと言えない（前掲節・注10）と、『万葉集』の女性の歌が必ずしも「反発的に詠み返す」作法を見せていない点を指摘しておられる。

だが、平安時代になると、『万葉集』とはむしろ逆に、男の贈歌に「反発、切り返しの発想」で答える女の歌が目立つて多くなり、それが、鈴木氏の言う「男女の恋の贈答歌の一般的な作法」となることが、よく知られている。藤井氏はこの現象について、「歌垣への一種の先祖帰りである」と見ることができないか（「歌垣から女歌へ」『国文学』平成元年・十一月）とも述べておられるが、それならなぜ、この時期になつて「歌垣」への「先祖帰り」といふ奇妙な現象が起ころねばならなかつたのか。平安時代の「女歌」に特有の「反発、切り返しの発想」の背後には、いつたいどのような事情が隠されているのだろうか。

そもそも日本の和歌は、恋愛と強く結びついて発達してきた。『万葉集』以後、平安時代初頭、唐風文化がもてはやされ漢詩が隆盛をきわめる中で、公的な場から和歌がほとんど姿を消した、いわゆる「国風暗黒時代」にあつても、和歌が、男女の仲を取り持つ重要な手段としてさかんに用いられ続けていたことは、『古今集』仮名序の、次のような記述によってよく知られている。

今の世の中、色に付き、人の心、花になりにけるより、あだなる歌、はかなきことのみ出で来れば、色好みの家に埋もれ木の、人知れぬこととなりて、まめなる所には、花すすぎ、穂に出すべきことにもあらずなりにたり。

勅撰集でも私家集でも、「恋」は、平安時代の歌集の分類項目のうち、常にもっとも重要なものの一つだった。男女の「恋」を抜きにして日本の和歌を語ることはいできないし、逆に、平安時代の貴族社会にあつては、和歌を抜きにして「恋」を語ることはいできない。『伊勢物語』初段を読めばわかるように、女性に懸想した当時の男性がまず試みるのは、その女性に和歌を贈って思いを伝えることだったのである。

その点、中国の漢詩は、日本の和歌と大きく異なつてゐる。古い時代の『毛詩』はともかくとして、『文選』『玉台新詠』など多くの集には、男性が女性に贈つて思いを

訴えた詩作を、まったく見出すことができない。儒教が社会思想として重んじられた中国では、男女の交わりはあくまでも「家」の秩序の中でおこなわれるべきものであつて、家父長の命によらない自由恋愛はすべて「淫乱」ないしは「淫奔」と呼ばれるべき行為であつた。女性に思いのたけを訴えるなどという行為は、その社会思想に根本からはずれたふるまいと言わざるを得ず、各詩集には、そのような詩は、当然のこととして、まったく収録されていない。

男女関係を主題とする詩として、それらの詩集に見られるのは、遠征から帰らなかつたり他の女性に心を移したりした夫への恨みを述べた、いわゆる閨怨詩や、それに類する作品のみである。我が身の不幸を嘆き夫の心変わりや恨むこの種のテーマは儒教倫理に反するものではなく、古くから詩の主題として生まれ、男性詩人も多くこの種の題で詩を作っている。それに対してこれ以外の、日本の和歌の「恋歌」にあたるような漢詩を、中国の詩集に見ることは、まったくできないのである。

## 三

しかし、詩集を通してうかがわれる漢詩に対するこのような認識は、唐代伝奇を読むことによつて一変する。小島憲之氏が『国風暗黒時代の文学・上』（昭和四三年・塙書房）ですでに指摘しておられるように、たとえば元稹の『鶯鶯伝』、李景亮の『李章武伝』、皇甫枚の『歩飛

烟』等の作品には、主人公とその恋人の間で贈答されたかなりの数の詩が収載されているが、それらの詩作のほとんどは、男女がたがいに思いのたけや別離の悲しみを相手に訴える内容のものであつて、その様相は、日本の「恋」の歌とよく似通つてゐる。『鶯鶯伝』で贈られてゐる詩は女性鶯鶯の作に限られてゐるが、『歩飛烟』では、短い作品の中に男女の詩の贈答が数多く示されており、それらの贈答によつて話が進展するありさまは、まるで日本の歌物語のようにも見える。

これら唐代伝奇の中で、男性主人公の恋の相手となつて活躍するのは、『鶯鶯伝』のような例外を除けば、当時の女性たちの中でも下層に属する「妓女」や「姬妾」であることが多い（黒田真美子氏『中国古典小説選』5）解説・平成一八年・明治書院）。実生活でもおそらくはそうだったかと推測されるが、少なくとも唐代伝奇の虚構世界の中で、当時の中国の男性知識人は、日本の遊女に近い存在ともいふべきこれらの女性との間に自由恋愛の漢詩をやりとりしてゐたと考えられるのである。

#### 四

さらに注目されるのは、『鶯鶯伝』『李章武伝』『歩飛烟』等の作品よりも先行して成立し、しかも男女の詩の贈答を数多く含む作品として日本人に大きな影響を与えた、張文成作『遊仙窟』の存在である。山上憶良が持ち帰つ

たかともされるこの作品は、『万葉集』の和歌の表現に大きな影響を与えていただけでなく、平安時代に入つても和歌や物語に大きな影響をおよぼし、その詞章の一部は『和漢朗詠集』等にも収録されている。そのように日本人にとつて格別になじみの深いこの作品で特に注目されるのは、その作中に多数見られる詩の贈答の、女性からの返答の一部に、さきの『鶯鶯伝』『李章武伝』『歩飛烟』等には見られない、日本の「女歌」の作法によく似た「反発的に詠み返す」表現が見られるという事実である。

『遊仙窟』は、主人公が西方の辺境への公務の旅の途中、深山の奥の仙境で崔十娘という美女と出会い、一夜の歓楽を共にして別れるという内容を述べる。その冒頭近く、館の中で奏でられる箏の音を聞いた主人公は、早速求愛の詩を贈るが、それに対して、次のような詩が届けられる。（訓読と訳は、仮名遣いも含め、前掲の黒田氏『中国古典小説選』5）による。）

面非 他舍面 面は他舍の面に非ず

心是自家心 心は是れ自家の心

何処関 天事 何処にか天事に関からん

辛苦漫 追尋 辛苦して追尋する漫かれ

（私の顔はあなたの勝手な想像とはちがいます）

（でもお断りしたい心はまちがひなく私の心です）

（あなたのお仕事と何の関係があるというのです）

（苦しんでまで追い求めないでくださいませ）

この詩を読み終えた主人公の目に、十娘の姿がちらつと見えたので、主人公は再度詩を贈るが、今回は次のような詩が返されてくる。

好是他家好 好きは是れ他家の好き

人非<sub>二</sub>着<sub>一</sub>人意 人は意を着くるの人に非ず

何須漫相弄 何ぞ須<sub>二</sub>あつらん漫りに相弄ぶを

幾許費<sub>二</sub>精神<sub>一</sub> 幾許ぞ精神を費せる

(そこまで好い女の人はきつと私ではありません)

(私はあなたの思い焦がれる相手ではありません)

(からかいも度が過ぎていきますよ)

(そんなことに心を費やしなさいませぬように)

思いのたけを訴える主人公に、十娘はこのように、けつして積極的に答えようとはしない。日本の和歌でも、たとえば藤原兼家からはじめて求婚の歌を贈られた『蜻蛉日記』の作者は、次のような歌を返し、「そんな人はここにはいません」と述べて、相手の気持ちをほぐらかそうとする。

かたらはむ人なき里にほととぎすかひなかるべき声  
なふるしそ

また、『顕昭古今集注』に引用されている、現存のものとは異なった『伊勢物語』(小式部内侍本)の定家本第九十九段にあたる章段では、主人公から「見ずもあらず見もせぬ人の恋しくはあやなく今日やながめ暮らさむ」という歌を贈られた相手の女性は、「私を誰だと思つ

て懸想しているのですか。人違いではありませんか」という意味を含んだ、次のような歌を返している。

見も見ずも誰と知りてか恋ひらるるおぼつかなみの  
今日のながめや

『遊仙窟』における十娘の詩と、これらの和歌の詠みぶりは、よく似ている。『万葉集』にこのような作例が見られないこと、『遊仙窟』が日本人によく読まれていた、というよりもよく学ばれていたことを考慮すれば、平安時代の女性たちのこのような歌の返し方は、あるいは『遊仙窟』から学び取られたものではなかったかと考えられるのである。

十娘はやがて主人公の気持ちを受け入れてゆくが、その後も続けられる詩のやりとりには知的な遊びがちりばめられ、彼女はしばしば主人公をからかい、もてあそぶ。そのような「作法」も含めて、平安時代の「女歌」の源泉のひとつとして『遊仙窟』を考えることは、けつして不可能ではないと思われる。平安文化は都市の文化であったと言えるが、その時代の貴族たちは、先進国の作品である『遊仙窟』の知的贈答を通して、都会的な女性としてのふるまい方を学んでいたのではないだろうか。

(国文学者・関西大学教授)